

道成寺藝術の展開

道成寺藝術の展開

道成寺藝術の展開

文學博士 高野 辰之

道成寺藝術すなはち世にいふ安珍清姫に關する藝術に就いて、茲には特に劇に現はれたものに重きをおくといふ態度で、此の説話の生因と固定と藝術化とに就いて略述を試みたいと思ふ。これに關する文獻中、最も集成抱擁の觀を呈するものは、いふ迄も無く和歌山縣日高郡御坊町の北にある天音山千手院道成寺の道成寺縁起圖卷である。これとこれより稍後れて出來たらしい能の道成寺と、此の二つが道成寺藝術史上に於いて、前を承けて後を開く所のものである。今此の二者が作り出される迄の經路と此の二者から生れ出た藝術、特に歌舞伎劇や操劇に於て、俗に道成寺物と稱するものの賞觀される所以に對して説く。

一、道成寺縁起圖卷の典據

道成寺といへば、誰も直にあの安珍清姫の事件のあつた寺かと思ふのであるが、最初から安珍だの清姫だのと稱へたのではない。此の説話は始めて日本法華驗記に紀伊國牟婁郡悪女と題して載せてあり、これより三十四年後れて出た今昔物語には之を書き和げて、紀伊國道成寺僧寫法華救蛇語と題して収めてある。此の二書は共に平安朝の中期以後に作成されたもので、これ等には一人の老僧と一人の若僧とが熊野參詣をして、牟婁郡の或寡婦の家に宿ると、其寡婦が若僧の美貌に戀着して、夜半ばかりに副臥して口説いたが、若僧者がさまざまに説いて破戒を免れようとした。しかしどうしても寡婦が承引しないので、それなら兩三日を待て、年頃の宿願である參詣を果した後に兎も角もしようといつて納得させて立つたが、參詣をすまずと別の道筋をたどつて逃げた。女は待つても待つてもく來ないので、通り筋へ出て熊野道者に問へば、其の僧はもうとうに下向したと答へた。欺かれたと知つた女は嗔恙の炎に身を焼いて、一念忽ち大蛇の姿となつて野山を分けて追ひかけた。僧は恐れて日高の道成寺に駈け込み、大撞鐘の中にかくして貰つたが、大蛇は其の鐘に巻つき火・を吐きかけて去つた。可哀相に僧は焼き殺されて灰となつてゐた。さて或夜のこと道成寺の上臈の僧の夢に二つの大蛇が現はれて、一つの蛇は生前若僧の時に法華の功を積まうと思ひ乍らそれを果たさず、追ひか

けて來た蛇と今夫婦となつてゐるが、どうか法華讀誦の手向を頼むといった。老僧が衆徒と共にそれを營むと、或夜一僧一女が喜色滿面の姿をして夢の中に現れ、我等はさきの大蛇であるが、法華の利益によつて、男は兜率天に、女は忉利天に生れたと述べて、感謝の意を表したといふことになつてゐる。

此の説話は恐らく外國から輸入したものであるべく、或は印度の羅刹女説話の系統に立つものであらうといつた人もあるが、女人の執着といひ、化して大蛇となる所といひ、其の本が印度種であることは疑もあるまいが、直接に影響して、道成寺説話の生成に參與したものは新羅の華嚴祖師に關する説話であると思ふ。此のことは後に詳述することにしていへば、法華驗記と今昔とは法華の利益を述べるのが主意で、彼の若僧はどこ何といふ者であつたか、又何時の時代の話であるか、一向まだ固着せしめて居らず、僅かに熊野と道成寺といふ名によつて勝手に浮動することを許さないだけの話である。然るに引續いて熊野參詣の盛んであつた鎌倉時代の間に、此の話は漸々固着せしめられたのであらう。

師練が元亨釋書の靈怪篇に同じく此の話載せて僧を鞍馬寺に住する安珍と云ふ名の者だとしてある。しかしまだ其の時代に就いては何時とも定めてなく、又寡婦の名も擧げてない。それがそれから五六十年後に出來たらしい道成寺縁起になると、時代は醍醐天皇の延長六年(九二八年)といふことになり、僧を奥州から遙々熊野に參つた者とし、女を紀伊室の郡眞砂の宿の亭主とし、それは清次庄司の姫で、相隨ふ者數在りけりと叙してある。これ以下は古傳と大差は無く、後の劇即ち能や淨瑠璃や歌舞伎の詩材に用ひられた道成寺説話は大略こゝに成立した。茲に我等は

何に因つて延長六年の事蹟と定めたか。

何によつて奥州の僧と改めたか。

彼の愛着心の強かつた女は寡婦か娘か。

元來何が故に道成寺に此の話が結びつけられたか。

の四つを考定することが肝要であらう。これには先づ道成寺の建立時代を究明する必要がある。寺傳によれば、文武天皇の勅願所で、紀大臣道成が奉行を承はつて大寶元年(七〇一年)に建立したものとしてある。しかしそれは屋代弘賢が其の道成寺考に述べてゐるが如く、正史の上に見えない事であり、紀道成といふ大臣もなく、何となく文武朝の創建とは認めかねるやうに考へてゐたのである。ところが昨年の夏參詣して寺趾から出た出土古瓦を見ると、紋様や形式の上から見て、確に奈良朝前期の物と認定すべきものがあり、平安朝初期と斷じたい物もあり、其の以後のものもあつて、文武朝の創建説は強ちに否認出來さうもないことになつた。今の本堂は幾度かの補修工事に、統一された様式の嚴存は認め難く、平安朝時代所か、鎌倉の中世に迄も遡らせることも出來まいと思ふが、其の舊規模の廣大なことから判じて、勅願所で

無くても當初餘程有力者の祈願所として設けられたことは考へられる。それへどうして平安朝末期にこんな話が結びつけられたのであらう。私は道成寺に、寺相當の撞鐘が無かつた爲であらうと思ふ。撞鐘は當然寺の創建後間も無く備へつけらるべく、當時はまだ我が國では鑄造術が發達してゐなかつたので、當然のこと三韓あたりから輸入せらるべきであつたが、使用に堪へない物が渡つ来たか、それともよい物が来たが、天災地變で破壊したまゝ再鑄されなかつたか、何れにしても當にあるべき處の大撞鐘が無かつたので、其の無い由來を物語るのに女人愛欲の熾烈と法華の利益とを教へる此の話を以てしたのであると考へる。

寺の所在地は矢田村の土生^{はぶ}、字鐘巻である。もし此の字の名が古いものであつたら、此の名に附會した説話として説明は極めて容易く運ばせ得るであらう。けれども古記録の上に此の名が出ず、土地の者も新しい名だとして、之を古名だとはしようとしてゐない。

撞鐘は法具中の主要物である。然るに道成寺には今もこれが無い。しかしどの劇に於ても必ず鐘の再建供養の場に珍事が出来ることにしてあるが如く、再鑄されたことは疑も無い事實であつた。今の本堂は専門家が見て室町初世よりも稍古いものとして認めるといふが、鐘の再鑄年代も之を許しさうである。凡そ寺の再建が出来て次いで鐘の出来るのは順序であらうが、鐘は正平十四年^(一三三五年)に再鑄されたのであつた。所が此の鐘がまた問題視されて不祥物として裏の竹藪の中に棄てられたのである。今京都の妙滿寺にあるのがそれで天正年中^(一五七二—一五九二年)豊臣秀吉の軍が拾ひ上げて軍陣用に供し、それが妙滿寺へ渡つたものとして傳へてゐる。けれども現存物は確に贋作で、模造した物でも無ささうだといふことである。但原物は元治元年^(一八六四年)返は儼存したのである。鐘のことは此の程度に止めて、本筋の藝術方面に移るべきであるが、史學専門の方のお集りの席であれば、此の鐘に就いてもう少し述べることに致したい。最も道成寺といへば誰もすぐ「鐘に怨は數々ござる」を思ひ出し、能でも鐘入を大切にするのである。

正平の鐘に就いては道成寺に傳つてゐる處の寄附者の後裔から寄せた彫刻板がよくその由來を物語つてゐる。曰く、
いつのころよりか都妙滿寺につたはれる梵鐘あり。そはこの御寺のために正平十四己亥年に逸見滿壽丸源清重
主其族吉田金比羅丸主とともに鑄られたること銘文に明なりけり。清重主は己が十六世の遠祖なれば、そゞろ
にその上のゆかしくて、宮古にものするごとくに、彼御寺にまつて、行者にたのみて鐘を見侍りて、

遠祖の鐘にのこせし名を見れば

そのよの聲もきくこゝろこちしつ

萬延二年庚申長月(一八六〇年)

とある。此の鐘は此の年より四年目の元治元年(一八六四年)に焼け失せたのであるが、明治八年三月二十六日の横濱毎日新聞が、今度成寺の鐘が東京浅草田圃の幸龍寺で縦觀させると記載した。之を見た右の瀨見善水氏は驚いて一書を新聞社に寄せ、同年五月十四日発行の紙上で之を公にした。それによると、明治七年十月廿七日の東京新聞に類似の記事があつたといふことで、焼け失せた鐘のある筈はないといふ一言に盡きる駁言であるが、鐘の由來を知る上に必要な文字であれば、特に其の一節を紹介したい。

南朝正平十四年吾遠祖該地ノ領主逸見萬壽丸清重、其親屬吉田源頼秀諸族ト戮力梵鐘二口ヲ鑄造シ一八隣村土生八幡宮二一八道成寺二寄附シ八幡社ノ鐘八今ニ現在ス道成寺ノ鐘八又唾鐘トナリテ寺後ノ藪中ニ置タリシヲ(一五七三、九二年)天正年間事故アリテ京都妙滿寺ニ運搬セシニ清朗ノ聲韻ヲ發セシカバ珍重スルコト數百年ナリシカレバ我遠祖ノ遺物ナルヲ以テ家人上京ノ都度一見スルヲ例トスサレバ去ル明治六年五月廿二日東京ヨリノ歸途モ尋タルニ豈圖ランヤ元治元年七月兵燹ノタメ堂宇諸器焼失シテ鐘及ビ銘文傳記一ノ存スルナシ遺憾ノ余リ家ニ記録セル銘文及梵鐘全圖ヲ謄寫シテ妙滿寺行者森石京二附與セリ依テ這回東京ニテ縦觀セル八何者ノ手ニ力成リシナラント江湖好事客二問フモノ八和歌山縣管下第六大區四ノ小區江川村ニ住ル同縣土族瀨見善水ナリ

これで現存の鐘に對して、正平鐘として請取れない理由はよく解せられるであらう。兎も角も鐘が正平の中年に出来たとすれば、寺の興隆も想像され、鐘に次いで縁起の作製といふことになるのが順序で、これは何人にも許される可き推測であらう。我等はこれより此の寺の縁起であつて、今國寶に指定されてゐるものの検討に入るべきである。さうして第一に知るべきは其の作成年代であるのにそれが判然としてゐないのである。本朝畫圖品目には應永年(一三九四、一四一八年)中の作とし、南紀名勝略志を引いて、繪は土佐光重、詞書は後小松院の宸筆だとも僧正徹だともいふが、宸筆風でない、多分正徹だらうと載せてある。

正平に鐘が出来たのであれば、それから五六十年後の應永年中に縁起が作られるといふことはまことに自然であつて、光重は確實に此の時代の人であり、後小松院は應永の最末三十四年に五十一歳でありなされ、正徹は四十六歳で、此等の上には別に諒陷のないいひ傳へである。

但此の縁起は大正八年國寶に指定される際にも、應永の物とは認め難いといふ意見があつた。其の詞書の書は繪よりも一段と劣るものであつて、後小松院の御筆らしくもなく、又徹書記とも認め難い書風で、随分無理なあて字もあり誤字もあるものである。例へば

件の女房夜半計に彼僧のもとへ行く絹を打懸制伏て云様わら我家には昔より旅人など泊らず今宵かくて渡せ給ふ少縁事にあらず誠一樹の影一河の流皆先世の契とこそ承候へ

といつた漢字澤山なものである。絹は當然衣とあるべく、制伏は副伏の誤らしい。制伏はセメフスと訓ませた例もあれば、或はそれによいかも知れないが、わら我家は妾が家であるべく、少縁事は少き糸にしの誤記、影は陰の誤たることは實に明かなことである。按ずるに應永に作成されたことに間違が無いとすれば、これは恐らくそれを寫したものであるべく、原本の詞書は先規を追うて假名澤山に記されてあつたのを、繪解きをする僧侶に續み易からしめる手段として漢字に改めて謄寫したのであらうが、非力の悲しさはたつた五六行の間にもこれだけの誤りを見せてゐる。かういつた處で決して此の縁起の價値を低落せしめることにはならぬ。奥に足利義昭將軍の花押があり、その説明書も附けてあつて、元龜天正(一五七〇、九二年)以前のものたることは明かである。繪は稚拙で雄勁で、繪が最もよく原本の舊態を保持してゐると思ふ。縁起物としては一寸變つたものであつて、多少の異見を抱く者があるにせよ、國寶に指定されてゐる處に、此の縁起繪卷の動されない價値は證明せらるべく、慾をいへば、此の繪卷の原本又はそれに近いものの發見せられることを希望するものである。

扨て彼の珍事を何に因つて延長六年(九二八年)にあつた事蹟としたのであらう。それに就いての私考を述べて、此の縁起の作成年代を推定しようと思ふ。凡そ寺社の縁起には、なるべく其の創設を上代に遡らしめようとするが常情で、系統を重んずる氏族制度を取つた我が過去の時代にあつては、時代の古きことを誇りの一つとしたのである。しかし乍ら百年を五百年とし、二百年を千年としたのでは却つて反證が顯れ易くて許され難いことが多い。そこで文獻の亡佚といふが如き遁辭で許されさうな、あればあり得さうな時代迄遡らしめるのが最も賢い方法であつて、巧に出來てゐる縁起類には此の點に留意したものが多し。けれども何の因由もない遡り方を爲すべきでない。佛家でいへば、百年三百年又は五百年といふが如き年回忌に用ひる數が先づ縁起作成者の頭を支配すべく、精々五百年位が人の信用を求め得べき限度であるらしい。神代の昔とか、聖徳太子の治世とか一千年以上を遡らせることは、全國中でも有數の古社寺である上に、餘程の由緒を有するものでなければいひ得られないことである。それをわが道成寺縁起は如何なる遡り方をして延長六年を割り出したのであらう。先づ普通限度の三百年を遡つたものとして、此の年より此の年間を降らしめれば、縁起の作成は安貞二年(二二八年)後堀河天皇の御代、鎌倉幕府の中頃といふことになるが、それでは縁起の畫風や文體とは合しさうもない。之を五百年遡らしめたものとして、延長六年より五百年を降らせれば、縁起の作成は應永三十四年(一四二七年)であつて、應永頃と鑑定した古人の所説にも合するのである。そこで私は暫くかういつて置きたい。

現存道成寺縁起の原本は應永三年(一三九六年)の作で、延長六年はそれから五百年を遡らせたものである。又逆にかう考へたい。延長六年は此の寺に取つて記念すべき事件たとへば改宗とか再建とかのことがあつて、それから五百年目に此の縁起が作成されたものである。

とかう考定したい。記念すべきことは、鐘捲取殺し以上の事で、取殺しは其の年のことに附會したに相違ないと考へるのである。しかしこれは全くの憶測であつて何か証據になるものが出た暁でなければ、到底成立せしめ得る推定でない。次は元亨釋書に鞍馬の僧安珍としてあるのを、何の爲に奥州の僧と改めたかの問題であるが、これは京近きあたりの僧といふよりは、山河幾百里の遠境から遙々上つて來た者の身の上につつたとする方が、怖ろしさも心細さも加つて來て、其の話は第三者から一層同情を呼ぶのに有力であつたからでもあらうが、他にまだ大切な一理由がある。

一条天皇の御代、左近衛中將藤原實方の歌を齊信が賞めると、行成は批難して、歌はいゝが、人柄に疵があるといつた。かうと聞いた實方は墳志の餘り、行成の冠を殿上で打落した。實方は其の爲に天皇の思召に違ひ、貶せられて陸奥守となり、遂にそこで歿した。その妻と子が實方が生前の素志であつた熊野參詣を果す爲に、遙々と上つて來た。熊野三黨の一たる榎本氏は實方の子の俊秀を喜んで、養つて其の女に娶らせた。やがて白河法皇が熊野へ行幸されて、仰があつて、長快を此所の別黨となされた。其の長快は他人でなく此の實方の實子であつたのである。これが一つの因を爲したのであらうか。奥州人の熊野へ參る者が多く、かの藤原秀衡の如きは其領内に新熊野神社を遷し祀つた程であつた。鎌倉の代も次の室町の世も、奥州殊に羽黒山伏がよく熊野へ參詣したので、時流に合せて奥州の僧としたのであると思ふ。

さていよく寡婦か娘かの問題であるが、前に引用した誤字澤山の部の前に、

醍醐天皇之御宇延長六年戊子八月之比自奥州見目能僧之淨衣着が熊野參詣するありけり紀伊國室の郡眞砂と云所に宿あり此亭主清次庄司と申人の娶にて相隨ふ者數在けり彼僧に志を盡し痛けり何の故と云事をあや敷までにこそ覺けれ然ば

と書起してあつて、前の文に接續するのである。道成寺では能や劇に娘としてあるが爲であらうが、媼をムスメと訓んでゐた。今も縁起を讀み聽かせることが行はれゐて、國寶に指定された物の外に徳川期に入つてからの模本が幾種もあつて、それを展べて讀むことになつてゐるが、其のどれにも媼の字を用ひてあつて、それを同じく娘と訓んでゐる。但それは間違であつて、ヨメと訓むべく、此處には古傳が保存されてゐるのである。媼は娶と同字であつて、同じく此の

室町時代に出た幸若舞曲などにも此の字を使用して、やはりヨメと訓じてあれば、疑も無くさう訓ずべきで、私はそれを道成寺の知事や執事にさう申出して置いた。能や淨瑠璃で娘にしたのは後に蛇身を見せる對照上、前身を成るべく若く且つ美しくする必要があつて、古傳を離れて仕組んだのである。相隨ふ者が多いとあれば、富裕な寡婦生活で、「昔より旅人など泊らず」と、人の宿などはしなかつた立派な家であつたと、鮮明に浮上らせ、元來宿を借りた者は老若の二僧であつたのを、纏綿網繆の利便を圖つて若僧一人としたなど、縁起作者も中々抜目の無い男であつた。此の若僧が歸路を他に求めて逃げ去つた時、寡婦は若僧が掛子のある筈を持遁げたと誣言して追ひかけることにしてあるが、此の筈とある所に、縁起の手本となつたものが暗示されてゐるので面白い。それは追て述べるが、縁起と今昔物語の記事との間には、記述情調の上に大した差異のあることは直に頷かれるであらう。何故にかうした異調が現れたのであろうか。それには先行繪卷の中に之を誘引したものがあつた結果であると思ふ。

同じく此の道成寺關係のものに日高川雙紙子といふ物がある。説話の結構は今の縁起とほぼ同一であるが若僧は清水寺の賢學といふ者にしてあるので、一に之を賢學の草子とも呼ぶ。そうして其の一・本に應永七年庚辰二月日於紀州名草郡日方村畫寫畢といふ奥書があつたと、考古畫譜に載せてあつて、種々の類本を記してある。現に帝室博物館にも土佐廣周筆を模寫したものもあるが、それには十六歳の姫が賢學に戀慕し、賢學は恐れて老僧と共に熊野詣をして避けよつとするを、日高の里まで追ひかけ、鐘の中にかくれたのを蛇體となつて川を越え、鐘をこわして、日高川の水中へ伴れ込むことにしてあつて、夢に成佛を告げる一條はない。私は道成寺縁起圖卷を前述の理由の下に、應永三十四年の作成と考定するが爲に、幾分は此の賢學の草子にも模したものであると思ふが、他にまだく此の二つのものに對して立派なお手本になるものがあつたことを説きたい。

それは華嚴祖師傳、略しては華嚴縁起と呼ぶものである。これも考古畫譜に種々の所傳を列記してあるが、梅尾の高山寺の藏で、詞書は明慧上人の作、繪は信實だといふことで、書は道家兼經等だといふことになつてゐる。元來八卷あつたものが二卷散逸して六巻だけ残つたのである。明治十六年(一八八三年)に博物館で修繕した時、古い裏打紙に元龜元年(一五七〇年)の記文があつて、それに

先年兵亂之時、足輕共執敵、爲彼兵火所々燒失了、然坊人共拾集之間、此坊取置也云々

とあつといふ物であるが、華嚴祖師の内元曉と義湘の分が危く兵火を免れて、今も紛雜亂次の儘につき合せてある。此の義湘の分がお手本であらうと思ふ。

元曉と義湘とは新羅の最盛時と稱せられる文武王治下の人で、我が天智の朝(六八七、九七年)より持統の朝へかけての人である。即ち義

湘が著名な浮石寺を創建したのは王の第十六年で(三國史記)わが天武天皇の第四年に當り、義湘が七十八歳で入寂したのは新羅の聖徳王元年で、我が文武天皇の大寶二年(七〇二年)であつた。此の二人の事は三國史記にも一寸出てゐるが、三國遺事の第四卷元曉不羈、義湘傳教の二條によく記録されてゐる。其の元曉の條に

師嘗一日風顛唱_レ街云。誰許没柯斧。我斫支天柱。人皆未_レ喻。太宗聞_レ之曰。此師殆欲_下得_二貴婦_一產_中賢子_上之謂

爾。國有_二大賢_一。利莫_レ大_レ焉。時瑤石宮

今學院是也

有_二寡公主_一。勅_二官吏_一覓_レ曉引入。官吏奉_レ勅將_レ之。己自_二南山

。來過_二蚊川橋_一遇_レ之。伴隨_二土水中_一濕_二衣袴_一。吏引_二師於宮_一。褌_レ衣曬_レ腹。因留宿焉。公主果有_レ娠。生_二聰_一。聰生而叡敏。博通_二經史_一。新羅十賢中_一也。……曉既失_レ戒生聰。己後易_二俗服_一。自號_二卜姓居士_一。偶得_二優

人舞_二弄大瓠_一。其状瑰奇。因_二其形_一製爲_二道具_一。以_二華嚴經一切無碍人_一道出生命_一名曰_二無碍_一。仍作_レ歌流_二于世

。嘗持_レ此千村萬落巨歌巨舞。化詠而歸。使_二桑樞瓮牖攫猴之輩_一。皆識_二佛陀號_一。咸作_二南無之稱_一。曉之化大矣哉。

……亦因_二海龍之誘_一承_二詔於路路上_一撰_二三昧經疏_一。置_二筆硯於牛之兩角上_一。因謂_二之角乘_一亦表_二木始_一二覺之微

旨_一也。大安法師排來而粘紙。亦知音唱和也。

とある。瓠は瓢で、之を持つて、謡ひながら化導たのであれば、我が空也は之を模ねたものといふべきであらうが、それは別として、元曉が殊更に川に落ちたり、寡婦の處に留宿したり、何となく我が道成寺臭い味を有するのであるが、高山寺所傳の繪傳には、こんなことを省略して、義湘と共に入唐求法の旅に上つたが、一夜塚の中に宿つて鬼に遭ひ、義湘と所見を異にして歸國したことにしてある。但海龍に誘はれて云々の事は縁起にも作りこめてある。すなはち新羅王妃の病が篤くて百方醫術を盡しても效驗がない。占はせると、海龍王の許にある經文を講讀すれば平癒することであつた。そこで勅使が龍宮に赴き、經文を乞ひ得て脛を割つてそれに収めて歸り、當時銅の鉢を叩いて、大安々と唱へて市中を遊行してゐた大安聖者に勅して八品に分たしめ、聖者の勧めによつて、元曉に之を講ぜしめられたら、妃の病が全治したといふことにしてある。これが華嚴の寶典金剛三昧經の疏である。高山寺の祖師繪傳は一部分紛失してゐるので、斷言しにくいがこの金剛三昧經を龍宮に遣して來たものを義湘とするらしいのである。但三國遺事の義湘傳教の條にはそれを記してない。廿九歳で落髪し、元曉と遼東を経て入唐しようとして問謀と誤解されて囚へられ、辛うじて遁げ歸つて、永徽の初、唐使の船に便乗して入唐し、華嚴の第二祖智儼を終南山至相寺に訪うて、玄旨を究明した。たまく唐高宗が新羅を伐たうとして、新羅の丞相を抑留したので、丞相は義湘に旨を含めて歸國させ、修法によつて害を未前に防いだことにしてある。次いで浮石寺の創建や、華嚴第三祖賢首菩薩から搜玄疏の相談をうける事等を

叙し、天宮へ往來したり、遠方の燈に點火したりといったやうな寄蹟に關しても記してあるが、愛情關係に就いては一言半句も録してない。然るに、華嚴緣起には大へんな事が綴られてゐる。それが道成寺緣起の藍本で、略述すればかうである。

無事唐土に着した義湘は途々食を乞うて行つたが、一富裕者の門に立つこととなつた。其の家は女主人で、其の名は善妙、容貌の美しいので知られてゐたもの、固より侍女も幾人があつた。容姿秀麗の義湘が威儀安祥として誦經する様を見て、善妙は忽ち貧着愛戀の念を起し、戸外に出で眉をあげ、聲を巧にして愛の満足を與へてくれと義湘に口説く。義湘はわれは塵染を去つて佛戒を守る者、望には應じ難いことわり且つ誠めれば、善妙はそれに教へられて、慾心を抑へようとしたが、又忽ち胸に燃ゆるが如き念ひが起つて、二たび義湘にかきくどいていふ。來世は二人とも共法師に生れあひ、われは貴僧の爲に化導の資縁を助けることに致したい。就いては愛憐を垂れて此の世で一度乞を容れて貰ひたいと哀願する。義湘がそれで止むを得ず憐んだとそこをたゞ一語に綴つてある。どの程度迄憐んだかは記してないが、其の後義湘は至相大師を訪ひ、頌釋を作つて記別を得ると、竊に道具を整へて歸國の途に上つた。虫が知らせたといふのもあらうか、善妙は大切な身のまはりの品を詰めた一つの篋を侍女に持たせて義湘を捜ね、今し船が港を離れた所へ駈け着けた。地團太を踏むが出た船は返らず、やがて霞の中に消えて行く。善妙は憤恚の餘り篋を取つて海上に抛ち、身を踊らせて海に入つたが、忽ち龍の姿と化して義湘の船を追ふ。篋も義湘の船に漂着し、龍も追ひついて、船を背に負うて進む處迄で繪傳は切れてしまふが、これから龍宮に到り着き龍は女と化し、義湘は金剛三昧經を留めて別れ歸り、龍女は大神通力を現はして義湘の化を資けるといふことにしてあるらしい。斷片の文字と繪とによつてはかう判斷したのである。さうして此の金剛三昧經が元曉によつて講ぜられることにしてあつて、此處から三國遺事の記載に合するのである。

元曉の情事は、彼土にあつては古記に明かであるにも係らず、義湘と合せて華嚴の二大祖師として尊宗し、高麗史の肅宗辛巳六年の条に

八月癸巳詔曰、元曉義湘東方聖人也、無碑記諡號、厥德不暴、朕甚悼之、其贈元曉大聖和靜國師、義相大國師、有司即所住之處、立石紀德、以垂無窮。

と見えてゐるが、肅宗は我が堀河天皇の朝に當る。即文武王の時より四百年後の高麗朝に於てかうも尊信されたのである。こゝに義湘の龍女濟度に關して深入りを爲すに先立つて、少しく我が華嚴宗の起源に觸れて置きたいと思ふ。

我が國へ華嚴章疎を傳へたのは、天平八年(七三六年)に唐の道瓊律師の將來が最初であり、同十四年に新羅僧の審祥、此の人は唐

の華嚴第三祖、賢首菩薩に學んだもので、來朝して大安寺に居つたのであつたが、良辨が此の人に華嚴經を講ぜしめたこともあつた。此等を以て起りとなされてゐる。けれども天平七年に大伴旅人の家で歿した尼の理願は新羅の者であり、もつと古くは持統天皇(六八〇、九七年)の御代に三方沙彌は新羅へ留學したのであつた。此の他に多くの歸化人もあり朝貢使も頻々として來たのである。此等の人によつて義湘や元曉の事蹟は俗傳を交へて神異や奇蹟味を豊富にして傳へられたに相違ない。さうして法華經に基く教義、たとへば天台宗が行はれるに至つては、その事蹟は提婆品の龍女成佛に引きつけられ、遂にそれを龍頭のあるべき鐘に結びつけて、撞鐘を有せざりし道成寺に附會したのではあるまいか。新羅の文武王の治下は法を弘め、我が文武天皇(六九七、七〇七年)の御代に當る時に入寂した義湘の事蹟は、我が文武の朝に創建せられたといふ道成寺へ結びつけるのに極めて好都合で、其の融合會通の滑かであつたことは、想像に餘りあることではあるまいか。思ふに道成寺が寺傳の如く文武天皇の大寶元年(七〇一年)の創建であるとすれば、當初は法相宗であり次いで華嚴宗の寺となつたのではあるまいか。寺でも最初は他宗であつたようにいつてゐる。それが平安朝に入つて今の天台宗となつたもので、彼の法華驗記や今昔物語の記事も、印度の羅刹女といふよりは此の新羅の華嚴説話が天台化して、法華の利益に結びつけられたものとして見たいのである。さうして特に一時華嚴宗の寺であつたように認めるのは、男は兜率天に生れたと夢の中に語る、それによつていふのである。道成寺は天台僧正が天台宗に改めさせたもので、その前は眞言であつたと縁起に記してある。千何年間かの永い間には幾度か改宗したことであらう。

華嚴縁起は中川忠順氏の説によれば、決して鎌倉の中世を下るもので無く、單に時代を以てすれば信實の時に近からうとのことである。即ち明慧が示寂の時と離れても、ざつと二三十年程の間といふことになるのであるが、此の圖巻の繪と詞との分段が長くて、所々に繪に短い詞や説明を加へてゐるのは、繪の所だけでも詞の所だけでも獨立し得ることであり過去に本文だけで繪のなかつた時代のあることを示すものである。自然此の縁起の文はもつとく古いものとなすべきであらう。其のこれに、

これは大願により佛菩薩の加被をつけて、かりに大龍となり、ふかく師の徳を敬重し、佛法を信ずるによりてなり。いはんやただ龍となるのみにあらず、又大磐石ともなれり……

とあつて、浮石寺建立の際の出來事迄にわたつて、一切を假化利益だとしてゐる。明慧も亦さう解して居たのであらう。梅尾の附屬に善妙寺といふ名の寺もあつた。かの縁起の詞の作者は所傳の如く明慧であつたとしても、それは勿論古傳に基いたもので、決して創作や假托と見なすべきではないと思ふ。

元來義湘善妙兩人の關係に就いてはまだ其の根據を搜索する必要があるのであつて、三國遺事以外の所傳に基くか、

それとも元曉の事蹟を義湘に連繫させる手段として、唐國より新羅へ遁歸する時の事に作爲したのどちらかであらうと思ふ。さうして此の作爲は華嚴緣起以前に起つたことで、もし三國遺事の類が他に一二部もあつたなら、容易く見出されさうに思ふが、總督府の朝鮮國書解題に就いてでは、あの程度の古書にそんな類のものがあるやうには思はれない。三國遺事は高麗の僧一燃が我が文永弘安(二二六四、八八年)の頃に撰んだもので、義湘傳教の次に蛇福不言の條があり、元曉も此の話の中に
出るのであつて、其處に

後人爲創_二寺於金剛山東南_一。額曰_二道場寺_一。

の如き文がある。それで此等の古説話の二三四五も道成寺縁起に何等かの影響を與てゐるのではないかと感ぜしめられる。しかし其の可否は朝鮮史の専門家に裁定を願ふことにして、標題に立戻つて私見を述べ續けるであらう。

明慧上人は實に道成寺に近い在田郡石垣庄内吉原村で生まれた人である。此の人の開いた高山寺に藏せられてゐた義湘や元曉の繪傳中の説話は、當然明慧の故郷附近での語り草となつたでもあるべく、明慧がもともと好男子であつた。四歳の時に父の平七武者重國が烏帽子を取つて着せ、美容であるから男にして、小松内府へ參らせようといつたのを忌んで、椽から落ちて見たり、焼火箸を顔に當てて醜くしようとした程で、しまひには右の耳を切落として佛道に猛進した人であつた。建仁三年(一一一三年)入唐渡天の志を抱いて萬里の波に身を任せようとしたが、春日明神にお止めを蒙つて渡航を見合せたことは古今著聞集や春日驗記に見えてゐる。此の渡航中止よりいへば元曉に類し、美貌に於ては義湘に似てゐた人であつた。但神佛の加被によつて其の歴史の上に何の汚點も遺さず、華嚴祖師の一人として永く尊崇を受け得た人である。

かういふ人の作と稱せられ、かういふ人の開いた寺中に藏せられた繪傳中の説話が、此の人の故郷に傳播し、それが故郷に近い道成寺の古傳説に加味せられたこと、換言すれば道成寺説話が華嚴緣起化して、現在の道成寺縁起を産み出したと考へても、決して不當妄斷の譏を受ける程の事ではあるまいと思ふ。即ち道成寺縁起は近くは賢學の草子に導かれ、更に遡つては此の義湘の巻を粉本として作つたものであるとしたいのである。華嚴祖師繪傳と道成寺縁起とは繪の間に短い繪解きや口詞を加へてゐることも同一であり、大切な龍の形も、龍の吐く炎も、全く同一に描いてある。相共に裕福な寡婦とし、管迄が兩方に出ることを思へば、兩者の間に至密の關係がないとは考へられず、關係があるとすれば、前述の如くであらうと思ふ。

(追記)講演を了へた日、道成寺の執事小野廣海さんから、重要な報告に接した。それにかうある。京都の内貴氏の許

で昭和二年一月十九日に古い道成寺縁起を見せて貰つた。これは大正六年(一九一七年)に大阪美術俱樂部に於て、税所子爵家

の藏品を求められたものである。道成寺縁起が國寶に編入されて後、福井利吉郎さんも見られて、道成寺の藏よりも書體が古く、繪も純土佐だといはれたとのことだ。大體寺の藏と同じであるが、二三箇處繪も詞書も餘計にある。詞書は一人の筆蹟と見受けた。上巻の末尾に全く別筆で、

天福山永壽寺常福院常慶主

とあり、下巻の最後に、俗に日蓮の作だといふ、四句の文

一天四海 皆歸妙法 後五百歲 廣宣流布

が古體の書で記されており、他に壽量品の文の記入もあるとかう知らせて來た。望む所の物が先づ一つ現はれたのである。福井君は道成寺のが國寶に指定される場合にも有力な參與者であつた。自然同君が寺のよりも古いと鑒せられたら間違は無いと思ふ。永壽寺の所在も知りたいが、天台宗寺籍簿で搜ねたら群馬縣下仁田郡小坂村にあることはあるが、それに常福院といふ支坊又は異稱の有無をまだ調べ得ない。或は法華宗の寺の中にあるかも知れない。

但私は一天四海云々の一行によつて疑問が一時に永解した。すなはち天下悉く妙法に歸すで、それを道成寺も天台宗に改まつた意に轉用して、それから五百年後の今、此の繪巻によつて法華の利益を廣宣流布せしむるの意に用ひ、改宗五百年の記念に此縁起繪巻が作成されたことを石げるのであることを知り得た。先に延長六年を以て改宗其の他記念すべき事件のあつた年と臆測した事は、これによつて臆測でないことが證明せられたとしたい。應永三十四年といふ推定はこれによつて間違はなかつたことが證明せられたとしたい。何となれば延長六年から五百年目すなはち應永三十四年である。これをもう一日早く知り得たら、縁起の作成に就いて假構の説明を爲す必要もなかつたのに、併せて聽者に不安を感じしめずに濟んだのだと思ふが、どうも止むを得ない次第であつた。

二、能の道成寺

轉じて道成寺縁起が劇藝術化された跡を一瞥するであらう。先づ擧ぐべきは能の道成寺で、勿論縁起に近く筋を立ててある。すなはち、まなごの庄司の一人娘が、父の戲言を信じて、わが家を宿坊として熊野に參詣をする客僧にいひ寄ることにしてある。戲言とは娘の幼き時に、あの僧こそは汝の夫よといったことであるが、幼心に誠と思つて年月を送り、幾年かの後、客僧の宿つた時、夜更け人靜つて後、娘から結婚の催促をしたので、客僧は驚いて道成寺へ遁込むこ

とにしてある。さうして折ふし日高川の水が増してゐたが、一念毒蛇となつてやすく渡つたといふことにして、義湘の海を川に代へてある。此の事は能の中の語りとても名づくべき所で物語られるのであつて、能の道成寺は全く此の寺の後日譚で、再建當日に於ける珍事を仕組んだといふ筋合のものである。前シテは白拍子、後シテは蛇形般若、ワキは住持、外に同宿二名に狂言方も出るのであつて、始にワキが今日の供養には女人は禁制だと申し渡して入る。そこへ處の白拍子が来て、是非入場させてくれ、その代りに舞を演じて見せるといつて、番僧をたらし入り込み、立舞ぶ様に窺ひ寄り、思へば此の鐘怨めしやと引つかづいてぞ失せにけるとなる。そこへ住持が現はれて、女人禁制の理由として前述のことを語り、日頃の戒功の試み時であると、衆僧と共に祈れば、引かぬに此の鐘動き出で撞かぬに高う音を發して、中から般若姿の者が撞木杖を持つて現はれる。さうして其の般若は打つてかゝるが、散々に祈られて、法力には敵し難く日高川に没し去るといふ筋で、かの女の怨念が今に祟りを爲すといふ趣意のものである。

道成寺は能に於て極めて重い物として取扱はれる。殊に其の鐘入前の亂拍子の處を至難の技としてあるが、其處は見ては一面向白くない。さうして何でそれを亂拍子と稱するかも知られない。亂といつても決して亂れてゐるのでなく、伴奏器は小鼓一挺で、此の小鼓と白拍子の踏む拍子とが、しつくり呼吸の合するのをよいとしてあるのである。凡そ世にいふ雅樂にも亂序亂聲等と名づくる所はあるが、そこは一切亂れてゐるのではない。そこで私はかう考へてゐる。かの楚辭の離騷などに見えてゐる亂と同意であるべく、註に理也とある其の意であらうと思ふ。亂聲は聲は理めて整へる處、亂序は序破急の序の部に於ける理聲である。このことは那智田樂などでも其の意であつて、先づ笛の音取があり、次にささら、次に太鼓といふ順で調子合せをする。たつたこれだけのことを亂聲と稱へてゐる。かうした譯で亂拍子は白拍子が鐘に躍入る爲の準備の足取の拍子であるとかう私は考へるのである。さあそれにしてもそれが三十分以上も類似な動作を繰返すので、初心の者はうんざりしてしまふが、恐らくこんな引延ばし細工は徳川時代に入つてからのことであらふ。能が今の如く悠揚味と典麗味を著しくされたのも、鳴物の寸法がやかましくなつたのも、元祿の少し前あたりからだらうといへば、能の道成寺にも此の頃にあつた長い厄介な亂拍子が制定されたものであらう。

道成寺の能は古く鐘巻と稱へた。此の名の上から判ずれば後日譚でなく、當初の鐘巻取殺の場を演じて見せたのではないかと思はれもしようが、それでは餘りに恐ろしさ気味悪さが劇場内に漲つて、觀者に身の毛を豎たしめることになるべく、恐らく作り出された始から後日譚として現在の如き構成であつたことと思ふ。

道成寺の能は元來美しい白拍子が諸人の目前で鐘入りをなし、少時の間に般若に變じて出る黒装變身の奇伎が喜ばれたのであらう。しかしそれだけのことでは、情味の濃やかな奥底の知れないといふ性質のものではないので、室町時代

にはさう悦ばれなかつたのもあらうか、能の大成者たる世阿彌の記録にも、他の能の書にも一向見えてゐない。さうして其の作成された時代も作者も明瞭でない。今普通の能樂書には觀阿彌の作のやうにあるが、あれはよい加減な書によつたものであると思ふ。大永四年^(一五二四年)に吉田藏人兼持が、安東典厩に所望されて、觀世彌次郎長俊と相談の上記した能本作者註文には、随分よく調べて、作者と作典を擧げてあるが、それには作者不分明の部に鐘巻として入れてある。これが信ずべきであると思ふ。但作成された時代は不明でも、作出の動機は次の如くであつたと思ふ。

正平十四年^(一三五九年)に鑄た道成寺の鐘は間もなく野外へ抛棄されたことは前述の如くであるが、其の原因は種種の不祥事があつてといふだけに傳つてあるといふが、あゝしたいやな傳説が古くからあるので、何等かの障病が涌かなければよいがと諸人は鑄造の際に心配した事ことあるべく、次いで又祥事にも不祥事にも解し得る事が起れば、そのすべてを不祥事に解していひ離した果ては、衆生の冥妄を覺醒せしむべき法器には適し難しとされて、遂に棄てられたのであらう。能は此の正平後間もなく大成されて、室町幕府の中世以降は之を保存しただけであるが、當時はまだ熊野參詣の道者が多く、西国三十三番の順禮も甚だ盛んな時代であつた。此等の人達に寺の裏に棄ててある鐘が問題視されて、いろく^くに喧傳されて遂に都にも傳つたので、道成寺の後日譚として、寡婦を娘にしてあんな風に仕込まれたのであると考へる。能にはもう一つ現在道成寺と呼ぶ作がある。これには當初の鐘巻取殺を仕組んであつて、女の名は白菊、やはり寡婦でなく娘にしてあるが、まだ清姫とはない。餘程近代味の勝つたもので、寛永^(一六八四年)から元禄^(一七〇三年)の頃迄の間に出たものらしく、又日高川と題する作があつて、毒蛇が客僧に祈り伏せられてしまふやうに反對に取扱つたものがある。果たしてこれが演ぜられたかどうか分らないが、ともかくもこれのあることだけは此場合報告して置かなければならぬ。

三、淨瑠璃及び歌舞伎劇の道成寺

和歌山出身の淨瑠璃語りに宇治嘉太夫といふ者があつた。加賀椽と受領して、延寶^(一六七三)から天和貞享元禄^(一七〇三年)にかけて、京都表で操芝居の地を語つて盛名を博した人であるが、此の人の語り物を集めた紫竹集といふ書に九曲と稱する重曲があり、其の中に道成寺といふ一段物がある。元來謡ひの名人であつたと云へば道成寺が此の人の語り物にされたのは當然のことといふべく、詞章は能の筋を簡約にした迄のものである。

加賀椽を壓倒して大阪に堅固な操座を興したものは竹本義太夫である。此の人の語つた用明天皇職人鑑は近松の作で、^(五八五、八七)

道成寺の鐘入りを作込んである。出語り出遣りの始として評判されたが、それは寶永二年(一七〇五年)のことであつた。能の道成寺の鐘入り前の亂拍子があんな風に大成されたのは、恐らく此の少し前あたりからであらうと思ふ。

元禄(一六八八—一七〇四年)當時にはまだ他に道成寺を詩材にした淨瑠璃が出たが、本行通りにすることは遠慮した時代とて、松の葉所載の昆布道成寺や男道成寺の如くにして、男道成寺の如きは娘を男にし、鐘入りを蚊屋入りにした。ふざけた物である。これ等はほんの一段單篇物であつて五段七段から成る長篇の淨瑠璃としては寛保二年(一七四二年)八月大阪豊竹座の道成寺現在蛇鱗が古く、此の中に始めて清姫の名が出る。藤原百川が山部王の擁立する譚へ作込めて、王の子に安珍やすちんといふものがあつて、百川が深謀を見破らぬ手段の爲に追放され、山伏姿となつて安珍と呼び、熊野參詣の途中眞子新左衛門の妹清姫と契ることにしてある。此の作が後年近松半二によつて日高川入相花王と作り改められ、川渡りの場だけが後々迄演ぜられて、歌舞伎でも人形振でやるにはやつたが、能の如くに秘曲扱にされるものではない。

歌舞伎劇では元禄十四年(一七〇一年)に江戸の森田座で演じた三世道成寺が一番古い。庄司の娘白菊の怨念が三世にわたつて、崇をなすといふを御家騷動の中へからませたもので、水中での大仕合ひを見せ、終りに總踊を見せるといつた至極こた／＼した作で、曲技を見せるといふ點に於ては、古意を傳へてゐるものである。次いで京阪地方に於て水木辰之助や榊山小四郎によつて演ぜられたといふが、委しいことは知られてゐない。やゝ後れては世にいふ上方唄に二三眞面目な道成寺唄が出た。出てもそれは一世に耳を敬たしめるものでなかつた。

道成寺が今世人の耳に親しみを感ぜせしめるのは能樂のその爲、淨瑠璃のその爲といふよりも、振事劇として即ち江戸長唄を地にして歌舞伎劇で演ぜられた結果だとして見るべきであらう。こけにも幾種があるが、代表作は實曆三年(一七三三年)江戸の中村座で始めて演ぜられた京鹿子娘道成寺である。これに關して説明を爲すことは度々之を見られた方には餘計なことでもあらうが、道成寺藝術の中で最も普遍性に富んでゐながら、存外味ふには予備智識を要するものである。よつて演劇研究者の獨りよがりとして批難をされない程度に於て略述するであらう。

敷舞臺、正面上下とも紅白の段幕を張り、處々に櫻の立木、日覆から三重に枝垂櫻の鐘枝を二段におろし、舞臺上手の櫻に張物の釣鐘を吊し、紅白なひ交ぜの綱を下手の櫻の木につなぎ、下手いつもの所に枝折戸といつたやうな舞臺装置や、甲乙二人の同宿が、坊主鬘に鼠の着附、黒の腰衣で數珠と中啓を持つてといひ、又白拍子の花子は前髪へ愛嬌毛のついてゐる中高の島田の紫の紐をとか、前髪へびらり帽子をとか、緋縮緬へ何を縫つた氣附とかいつたやうなこと、乃至は赤房づきの扇を右に持つて胸にあて、左の袖を其の上に重ねて、科しなをし乍ら出て來て、スツポン即ち花道の七三といつたやうな服装や科しなに關することは一切省略することにする。さうして其の構造様式を切詰めていへば、京鹿

子娘道成寺は能の道成寺の前半をなす處の白拍子の舞を見せることを主にしたもので、これへ何の關係も無い舞踏を加へたものである。さうして其の加へ方は實に亂暴を極め、いはば道成寺の名を借りて勝手な藝づくしをするものである。ざつといへば文句も所作も七段に別れてゐるが、必ず七段に仕組む必要があつたものでもなく、従前は五段であつたものを此の京鹿子の時に七段に増大せしめたので、其の増大は道成寺説話に何の關係を有するものでもない。其の結果、文にも筋にも統合を嫌いて一貫した趣意といふものがない。僅かに起首の一段と終の鐘入とにほんの言譯迄に道成寺劇の形式を示すといふだけのものである。

起首は即ち出端で、義太夫が常盤津かの淨瑠璃の間に白拍子が出て、同宿たちとの間に問答があり、烏帽子をつけ中啓を取つて、舞の構になり、長唄の地に變つて第一段に入るのである。

第一段は鐘に怨の所で、金箔置紫紐の烏帽子をつけ、中啓だけを持つ物にして舞ぶが、一曲中最もむづかしい處としてある。第二段はいはず語らぬ我が心、亂れし髪カミの亂るゝも、つれないは唯移り氣なと男女の惡性を叙してあり、踊り手は兩袖を揃へて右へ出したり左へ出したり、袂で打つ眞似をしたり體をそらしたりする處、次の第三段は手毬の段であるが、唄の文句は諸國の遊里づくしである。次の第四段は最も華麗な花笠の段で、梅とさんく櫻は何れ兄やら弟やらといふ唄に合せて、赤の絹張に金の縁をとつた笠を被り、兩手に同一の笠を持つて踊る。次は優婉を以て秀でてゐる戀の手習の段であるが、唄は全く當り文句の行列で、寄木細工といふ評を甘受しなければならぬ。濡氣澤山甘味たつぷりの間に、當代子女をして陶醉氣分に陥らしめる力が包含されてゐたのである。第六段は諸國国の山づくしの唄に合せて、羯鼓を打つて踊るので、山づくしの段とも羯鼓の段ともよぶ。次が鈴太鼓を持つて、花に心を深見草、園に色よく咲きそめてといふ唄に合せて踊り、さてキリに入つて、花の姿の亂髮思へばく恨めしやと龍頭に手をかけ飛ぶよと見えしが、ひつかづいてぞ失せにけるとなるのである。これから同宿どもの浮かれくた引上げになつて、歌ふも舞ふも法の聲、何でもせいア何でもせいと唄ふと、ヤレ来いやいと銀の鱗ヨシの四天ヨテンを着た者が十人花道に並び鐘の中が怪しいと舞臺へ来て綱を曳上げると、中から花子の般若姿、白地へ銀の鱗の着附、緋精巧の長袴、薄衣かづき紅白の撞木を持つて立身、四天が附いてまはつて花道へかかると大太鼓、向ふ揚幕から荒藤太が荒事の約束通りの鬘隈取着附で出て押戻し、花子は實にもたへなる奇特かやといふ唄一ぱいに鐘へ上り、撞木を持つて見え、幕。といふことにして演ずるのである。即ち最初の出端が此の一曲の序、踊の七段が破、終りの鐘入以下が急で、破の處で白拍子に扮する俳優の踊を見せるのが主であつた。當然のこと假化利益や龍女成佛の原意は全く忘れ去られてゐるのである。元來は宗教説話であつたものが、能以來娛樂本位のものに代つて、遂には何の信仰をも含まないものと變じてゐる。これは徳川時代に入つて、劇の

筋立は次第に複雑となり、果ては合作の風が盛んに行はれるに至つて、劇一曲の全部を通じて演ぜず、當り場だけを抜いて興行することになつて、観客はついに劇の全部に一貫せる想を味ふことなく、單に優人の特技を見ることになつた。すなはち劇を見ずして俳優を見ることとなつた。さうしてそれが支離滅裂な作品をも請入れることになつたのであるが、不統一とか滅裂とかに於ては京鹿子はまさに其の標本的なものである。又我が國民は彼の甚深微妙の法を其の形式だけに於て、乃至は咀嚼し易き淨土往生といったやうな方面に於てのみ請入れたが如く、此の宗教的の深い意義を藏する説話に對しても、次第に甘く、次第に陽氣に輕快に、全く以て娛樂本位に改造してしまつたのである。此の事はひとり道成寺關係の藝術の止まらず、他の一般藝術の上にも認められるのではあるまいか。

(一八六八年)
明治維新後の變革は邦劇や邦樂の上にも及んだが、音藝は觀衆の意に随つて、遂次に變遷するもので、他の建築の如く、彫刻の如く、又小説の如く、或一部の人の歡迎のみによつて世に立ち得るものではない。自然其の情勢は徐々に變じて來たのであるが、邦劇と邦樂に對しては政府は放任政策をとり、國民は默視的態度を取續けた。此の結果洋劇とともに洋樂は次第に榮えて來たが、それは國民一般の嗜好がさうなつたのでなく、政府の態度がそれを獎勵することになつたが爲に、少年青年にそれのみ理會し、また味ひ得るやうに仕向けたが爲に、かうなつたのである。成行任せにするもの、殊に藝術にあつては、それの上に懷敗と亡滅とは免るべからざるものである。此の京鹿子道成寺にしても、九代目團十郎より奥儀を傳へた今の六代目菊五郎以外には本當に踊れる者が無い。二三十年後に此の道成寺の踊は果して見られるであらうか。道成寺説話は國民の性情に合致する處があつて、それが爲に過去に於て化導の材となり、戯曲の材となりしたのであつた。他日國民とかの獨自といふことが一層強化される曉には、他の詩材に用ひられた説話類と共に、再び新なる藝術化の下に新しく作り出されるでもあらうが、我等は完成された過去藝術に對して、全く成行きに任すべきものであるか否かに就いて、此の際じつと考へなければならぬと思ふ。かの能樂や操劇などの前途に對しても、昭和の御代に何等かの方案を立てなければならぬであらう。もしもよろしくそれを成行任せにすべく、それが正道であることに定まつたなら、後人が之を研究するに適するやうな記録、出來得べくんば人形繪畫寫眞等を作つて詳密な説明を附して置くべきであらうか。

昭和廿九年七月廿四日寫本完了。此の日芝口常楠氏と道成寺に至り、同寺所藏の古文書を寫す。これ編纂中の「矢田村誌」に収録のためなり。

昭和廿九年七月廿四日

清水 長一郎

活字化を終わって

此の「道成寺藝術の展開」の著者高野辰之氏(一八七六年)昭和二十二年(一九四七年)は長野県下水内郡永田村(現中野市永江)出身の国文学者、作詞家。東京音楽学校教授等。号は斑山(はんざん)。以下のような文部省編尋常小学唱歌の作詞者であることが広く知られる。

「故郷」(作曲：岡野貞一)・「朧月夜」(作曲：岡野貞一)・「もみじ」(作曲：岡野貞一)・「春がきた」(作曲：岡野貞一)・「春の小川」(作曲：岡野貞一)。

また 大正十四年(一九二五年)に「宮子姫和讃」を作詞し、前道成寺住職堀田廣海氏が作曲した。

この「道成寺藝術の展開」は何時発表されたものか写本には記載がなかったが、道成寺に問い合わせたところ、小野俊成院代さまより昭和三年と回答を戴いたうえ、抜刷りを複写させて戴き、筆写本と照合しながら校正を行った。

平成二十一年(二〇〇九)年四月十八日(土)

清水 章博